

音

Megumi Miura

三浦惠

符

音

Megumi Miura

三浦惠

符

三浦 恵（みうら めぐみ）
1966年、和歌山生まれ。
『音符』で第29回文藝賞受賞。

音符

1992年12月25日 初版印刷
1993年1月10日 初版発行

著 者 三浦 恵
装 丁 坂川栄治
発行者 清水 勝
発行所 株式会社 河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2
電話：3404-1201(営業) 3404-8611(編集)
振替口座 (東京) 0-10802

印刷 大日本印刷株式会社
製本 小高製本工業株式会社

©1993 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります。
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
ISBN 4-309-00817-8

音符

1 四月

大きなガラス窓から溢れる光を背にして、彼女は話している。眩いばかりの光が体の輪郭に積もり、弾けるように輝いている。彼女の正面に立った女の子の横顔が笑う。白い歯が零れ、肩が小刻みに震える。セーラーの端が艶やかに光っている。彼女の顔は影に包まれていて、表情はわからない

い。

人影が私の目の前を横切つてゆく。遠くで歓声が巻き上がる。制服の影があちこちで揺れている。中に交じるシャツの白さが目に痛い。こそこそと雑音が辺りを埋め尽くし、キュキュと鳴る足音が、その中を繰り返し通り抜けてゆく。彼女たちの会話は、そんな休み時間の喧騒にことごとくかき消され、私の元へは、わずかな断片も届かない。

女の子の耳に声を寄せようと、体を傾け、彼女の口もとが光に露になる。薄いくちびるがゆっくりと静かに形を変えてゆく。言葉が、光の中へと、ひとつずつ零れてゆく。私は彼女の声をそうして聞いている。

初めてその声を聞いたのは、数日前だった。高三になって初めての国語の選択授業。教室には隣のクラスの生徒が多く交じり、彼女は、窓際のいちばん後ろの席に座っていた。その机は等間隔に並んだ列から大きくはみ

出し、後ろの壁までの広い空間を、彼女がひとり自由に占めているかのようだった。窓から強い日射しが降り注いでいる。片手で頰杖をし、前かがみの姿勢で、彼女はずっと窓の外を見ている。風に短い前髪が緩く靡く。細い首に繋がるなめらかな横顔の線が透き通って見えた。

教師が彼女を呼ぶ。教室が息をひそめるように静まった。彼女はゆっくりと視線を起こし、そして丁寧に答える。「はい」教師は朗読を命じる。彼女は立ち上がる。椅子の足が床を擦り、鈍い音をわずかにひきずって止まる。机の上から教科書を拾い、両手に乗せて、背筋を伸ばす。そして彼女は静かに目を落とし、ゆっくりと言葉を発してゆく。

溢れんばかりの光を浴びて、彼女は、ひとり舞台に立つ美しい影となる。太陽の位置は高く、私の席からは見えない。教室は、ちょうど真ん中で光と影に分断されている。光の中に並んだ机の端が一樣に輝いている。紙の擦れる音や密やかな会話がかきこそと響き、それをまっすぐに破るように、

彼女の低く艶やかな声が、やわらかく宙を泳ぐ。

どんよりとした午後の空気がいっぱいに澱んでいた。眠りがすぐそばに忍び寄り、現実との境がゆるく溶けていきそうだった。彼女の声を聞きながら、私はその向こう、窓の外に広がる空を眺めていた。薄い雲の帯が、彼方へ吸い込まれるように流れて消えた。

その時だった。突然、体がすとんと落ちたような感覚が走った。時間が停止し、映像が静止し、空気が滞った。何かがぷつりと途切れてしまったような、一瞬の不均衡。私は顔を上げ、周囲を見渡す。風景は何ひとつ変わっていないかった。

鈍った頭を奮い立たせようと、私は黒板を注視する。ぶれた教師の姿がだんだんくつきりと浮かびあがる。教師は手元の教科書に目を落としたまま、彼女の朗読に耳をすませている。生徒は皆、静かに俯き、教室は柔らかな秩序に守られている。窓の端にぶらさがったカーテンが揺れ、風がす

るりと通り抜けた。教室は彼女の声以外、もう何も聞こえない。午後のけだるさが作った澱み、そんなふうにも思われた。

まもなくそれはまた、まるで降ってくるかのように現れた。細い刺が背中を引つ搔く。違和感が走る。そしてそれは、すぐにまたさりと身をかわし、何ごとともなかったかのように、元の風景の中に戻って消えた。私は、痛いのか痒いのかもわからないまま宙に放りだされ、途方に暮れた。どこから？ 周囲をもう一度ゆっくりと見渡し、耳をすます。視界が移動し、そして、固定された。彼女？

朗読は続いている。私は彼女をじっと見ていた。同じ風景。その中で、彼女の声だけがゆっくりと変化し続けていた。

私はその響きに揃えて、口の中で同じ文章を唱えていった。私と彼女の声はぴったりと重なって続いてゆく。まるで私の声が彼女の声であるかのように。そして私は確かめる。彼女なのだ、と。途中で音が歪んだ。わず

か、に。小さく。そしてその瞬間に同じような不確かさが私を包んだのだ。そこまで、と教師が告げ、彼女は言葉を閉じる。肩の力を緩ませて、教科書を机に戻し腰を下ろす。床の上に刻まれた影が形を変える。彼女はしばらくぼんやりと宙を見つめ、おもむろに前髪をかきあげて、窓の外に視線を散らす。白い指が髪の間に見え隠れする。私は何度も彼女の声を呼び起こし、反芻していた。その不思議な声は、耳の奥底で、チリチリと響き始めていた。

2 五月

チャイムが鳴る。雑多な音の塊が吹き上がり、そしてすうつと消えてゆく。吸い込まれるように誰もいなくなった廊下には、ほんやり光が降り積もり、舞いあがった埃がキラキラと輝いている。

席の横の窓を私はさらに押し開ける。その向こう、廊下の窓に広がる中

庭の木々の葉が、一瞬、視界をやさしく覆い尽くす。風がゆるく頬を押す。ノートの端がひらりとすくわれる。遠くから、他の教室の教師の声やチョークが擦れる音が聞こえてくる。

前の入口を抜けて教師が現れ、教壇に数名の生徒が呼ばれる。黒板の前に頭が並び、手がくるくるっと翻る。そこからは羅列された文字が糸のようにな流れ出し、その音が、断片的に幾重にも重なって、教室中を支配する。隣の席の男の子が、私を呼ぶ。肩ごしに顔を私のほうに向けて、低い声で言う。「ノート、見せてもらえないかな」目尻が少し下がって、柔らかい微笑みが零れる。私は教師の背中を確かめて、ノートを差し出す。

彼は前の席の男の子の背中の中で、私のノートを書き写してゆく。白い袖口から出た大きな手。鉛筆をもった指は、節ばって長く、所々に小さな滲みが見える。

「ありがとう」もう一度微笑みながら、丁寧に彼は言葉を発し、その手を

伸ばして、私の机にノートを置く。私も少し微笑んでみる。

彼の名前は名字しか知らない。もうひと月以上隣に座っているのに、話すのはこれが最初だ。

彼女が、よく、彼のもとへやってくる。私たちの教室の後ろの入口をすりりとくぐり抜け、しなやかに彼の席まで歩いてくる。細い後ろ姿が、私の目の前にまっすぐに立つ。彼女は彼の名前を呼ぶ。彼は顔を上げ、彼女を確かめて、微笑みを浮かべる。そう、同じ表情。彼女は彼の前の席に座り、振り返るようにして彼と対面する。話しながら彼女は目を伏せ、そして時折彼の表情をうかがう。生え揃った睫毛がゆるやかに反っている。きれいに整えられた爪先が机の上で遊ぶ。くちびるは静かに動き、時々大きく開かれる。彼女が笑う。彼も可笑しそうに上を向く。彼が何かを尋ねる。彼女は少し考え、そして答える。今度は彼が笑う。ふたりは始終ぼそぼそと話し、そこはまるで透明な暗がりのように見える。

噂。ふたりが恋人であるという。もう何度かそれは教室の話題となり、そして時折彼の席で止まる。その度に、彼は否定する。簡単な弁解を付け加えて。それはいつも決まっている。中学の同じクラスだったこと、そして、彼女には恋人がいること。ふたつめの言葉でいつも誰もが納得し、その話題はしばらくの間忘れ去られる。

教師が私たちの間をすりぬける。靴をコツコツ鳴らして、細い通路を教壇へと歩いてゆく。彼はノートの上で鉛筆を動かしている。くせのある短く黒い髪が、汗がうつすらと滲んだ広い額に落ちている。細い目は鉛筆の先をしっかりと追ひ、口は固く結ばれている。鉛筆を握りしめた手が止まるのを見て、私は視線を戻す。彼がゆっくりと背を伸ばしてゆくのが横目に映る。

太陽が雲に翳って、廊下は薄い幕を下ろしたように灰色に沈む。腕時計の針がチクチクと音を刻む。雑音がじりじりと膨張し始める。教師がそれ

を追いかけるように硬質な声を張り上げる。高らかにチャイムの音。ため息が教室の隅々から漏れ落ちる。

